

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(10) シュワイツァー

- ・ いったい何が善で何が悪かを定める原理とは何か
 - ・ シュワイツァーは河馬の群の中で直観した人間の意識のもっとも直接的な事実
は「われは、生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である」
 - ・ 「善とは生命を維持発展させるもの、悪とは生命を否定し阻害するものである」
 - ・ 「生命」とは人間のみならず動物や植物も含むもの。すべての生命は神聖なものであって、その神秘的な価値をあるがままに認めること、つまり、「生命への畏敬」こそ倫理のみならず文化の根底になければならない。
 - ・ 「生命への畏敬」とは無用の殺生を避けること。さらに積極的に、自分の生を育むと同時に、すべて生命あるものに助力を惜しまないということ。
 - ・ 一般に人間には自分自身のために思いどおりのことをしたいという気持ちと同時に、他人のために何か役立ちたいという本能にも似た衝動があるものだ。
 - ・ これを「自己完成の倫理」と「献身の倫理」と呼ぶ。この2つの倫理は、「生命への畏敬」という原則によって一致しうるものである。「生命への畏敬」という原則に立てば、人間はおのずから「自己完成」と「献身」に向かうものだと考え、実践した。
 - ・ 「人間のうちには表面に現れるよりはるかに多くの理想的意欲が存在することを私はかたく信ずる」
 - ・ 地下に流れる水は目に見える流れより多いように、人間が心の中に秘めている、あるいはわずかに開放している理想主義は世に現れたものよりはるかに多いのである。
 - ・ つながれたものを解き放つこと、底を流れる水を地上に導くこと——この一事を成就すべき人間を人類は待ちこがれているのだ。
 - ・ 「人間はだれでもランバレネを持つことができる」理想に燃えて他人に奉仕するところにこそ、人間の本当の幸福がある。
- * 「ランバレネ」は 1913年にシュワイツァーが病院を建設することになった土地。当時はフランス領植民地で、現在はガボン共和国。赤道南約 60 キロメートル、大西洋に注ぐオゴウエ川の河口から約 200 キロメートルにあり、フランス宣教師団の一つの拠点でもあった。



シュワイツァー病院